

2021年6月20日 聖餐式説教

主イエスの弟子達のうち、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの四人ガリラヤ湖で漁師をしていた人達でした。彼らは主イエスに招かれた時、網を捨てて従っていったと記されています。それはただの決心ではない、今まで自分を支えていたもの、自分の存在意義、そうしたものをすべて捨てて従っていったということを現しております。弟子達は主イエスと生活を共にし、主イエスが出かけられるところ、なさるところどこでも一緒についていって行きました。やがて主イエスの回りには大勢の人達はその評判を聞いて集まってくるようになりました。行くところ行くところ大勢の人達が集まってくるので彼らはもはや自分達が自由に行動できないケースも増えてきてしまいました。そういう時、主は、弟子達と共にガリラヤの湖の沖へ船で行き、そこから人々に教えたり祈りの時を持つようにしていたようです。主はどんなときでも祈ることを絶やしはしなかったのです。

本日の福音書の箇所も群衆を離れるため、主イエスは弟子達と共に船に乗られました。もう一つの目的は向こう岸へ渡り、そこで伝道をなさるためでもありました。

ガリラヤ湖は海面下212mにあり、回りを山で囲まれているため気象の変化が激しいのが特徴でした。穏やかな日和だと思っていると、突然突風が吹いて来て湖が大荒れになることは決して珍しくはなかったのです。本日のこの箇所もそうした場面であったようです。しかしそれは普段よりかなり激しいものであったに違いありません。船には弟子達が乗っていたのです。そこには当然ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネも乗っていたわけです、彼らは漁師でした。湖のことは誰よりもよく知っています。いわば彼らはガリラヤ湖のプロであったのです。そうした彼らが四人もそろっていたのに、全員が恐怖に陥り、主イエスに助けを求めたのです。

ところが主は眠っておられました。弟子達はこの一大事に眠っておられるとは何ということであろうかと思ったのでしょう。「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」この言葉の中には、何があるのでしょうか。この一大事に眠っているとは何と非常識なことか、自分達がこんなに必死になって精一杯やっているのにどうしようもなくなるようなところに主はどうして自分達を連れ出したのか、何でこんな目に遭わねばならないのだ。弟子達の言葉の中には

こうした心が込められているようです。これについて少し考えてみましょう。弟子達は主イエスを信頼していました。漁師を捨てて自分を支えていた存在も全て捨てて主イエスにしたがっていたのでした。その決心は並々ならぬものであったことでしょう。しかしこの嵐の前に弟子達は、普段の主イエスへの信頼も、弟子として召されたときの心も、弟子同士の交わりもみんなどこかへいつてしまったのでした。そしてただ、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と不満と共に自分自身のことしか考えていない言葉が、弟子達の自己中心の心が表面に出てきたのでした。主が「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」と言われたのは、こうした弟子達の態度に対して主は言われたのでした。それは普段の時は主イエスを信じている、疑いもしないし従っていく決心も並大抵のものではない、しかし逆境になると主なる神へ従う心を忘れ、不満を言い、信じる心がどこかへいつてしまう、私達人間の持っているそういう面に対し、主はこの教えを与えられたのでした。それは、信仰とは普段も大切であるけれども、逆境にあるときこそ信仰が本当に試されるということ、主なる神の与える平安がなくては逆境を乗り越えることが出来ないことが示されております。

この船は私達の信仰生活のことを例えているのです。私達は嵐を望みません。幸せに毎日楽しく災難もなく、出来れば要領よく人生を過ごしていきたいと誰しも考えることでしょう。しかしそれだけでは決してないことを私達はよく知っています。私達の人生には主イエスが共におられることをしっかり覚えておきたいものです。私達は主が共におられることを実感し、普段からよく心に留めてこそ、人生の最も激しい嵐に対しても平安を保つことが出来るのです。